

# スタジオフォーレの名器『ベヒシュタイン』

中村ゆかり（音楽学／音楽評論）

皆さんの目前に、どーンと鎮座する楽器。優美なアール・ヌーヴォ調のデザインと職人の手仕事を伝える透かし彫りの譜面台、艶やかな漆黒のボディと、アイボリーの鍵盤に目を奪われた方も多いと思います。このピアノは、今から100年以上前の1904年にドイツが誇るピアノメーカー「ベヒシュタイン」が製造した、世界的にみても大変貴重な楽器です。

## ベヒシュタインの歴史

スタジオフォーレの楽器についてお話する前に、ベヒシュタインのことを、少しお話をしたいと思います。ベヒシュタインは、スタインウェイ、ベーゼンドルファーと並び、世界三大ピアノの一つとして数えられるドイツを代表するピアノメーカーです。19世紀半ば、スタインウェイと同じ1853年に、ベルリンで産声をあげました。誕生から間もなく、なんと作り出して3台目の楽器を指揮者でピアニストのハンス・フォン・ビューロー（1830-1894）が弾き、高く評価したことにより、一躍脚光を浴びることになります。

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、多くの音楽家に愛奏され、発展を遂げたベヒシュタイン。パリからワイマールに移り住んだリストが、ベヒシュタインを長年愛奏したことや、ドビュッシーがこの楽器のために多くのピアノ曲を残した事は、とりわけ有名です。ドイツが敗戦国となる第2次大戦まで隆盛を極めたこのブランドは、戦後アメリカ企業に買収され、一時衰退を余儀なくされましたが、1980年代に再びドイツ企業に買い戻され、現在、新たな歴史を刻んでいます。

## 比類なきベヒシュタインの音色に魅了された名ピアニストたち

ベヒシュタインの生の音は、残念ながら日本ではなかなか聴く事ができません。かくいう私も、初めてベヒシュタインの音を聴いたのは、名ピアニスト達が残してくれたレコードからでした。ちなみに、私を初めてこの音色の虜にしたのは、ベヒシュタインを愛した夭逝のピアニスト、ディヌ・リパティです。他にも、世界初のベートーヴェンのソナタ全曲録音を行った巨匠A.シュナーベルや、その弟子の名手カルロ・ゼッキ、ヴィルヘルム・ケンプやバックハウス、チッコリーニなど、多くのピアニストたちが、ベヒシュタインの音色に魅了されてきました。

ベヒシュタインの音色の大きな特徴の一つは、その透明感とされています。速い音の立ち上がりと減衰によってもたらされる、雑味の無いシャンパンの泡の如き粒立ちのベヒシュタイン・トーン。特殊な構造を備えた弦と響板、フレームが織りなす清廉で温かなサウンドは、この楽器ならではの大きな魅力です。

軽やかなアクションと発音、奥行きと深みのある多彩な音色、弱音やペダリングによる微細な表現の可能性は、ベヒシュタインの最も面白いところであり、スタインウェイやベーゼンドルファーと大きく異なるこの楽器の特性が、それを求めた音楽家たちに、とりわけ重用されたのです。

## スタジオフォーレのベヒシュタイン

さて、皆さんの目の前にあるベヒシュタインは、1908年製のモデル C とされる楽器です。鍵盤には、アフリカ産（おそらくケニア）の象牙が使用されています。

20世紀初頭は、ベヒシュタインが年間5000台近くを製造したブランドの黄金期で、生産数だけでなく、使用された材質、技術的観点からも、最も良い楽器を作ったと言われる時代です。1908年製のスタジオフォーレの楽器は、この時代に生まれた、まさしくベヒシュタインの特徴的なサウンドを奏でてくれる楽器と言えます。

現代の音楽家の中にも、この時代の楽器を自宅で愛奏する世界的なピアニストは少なくありません。指揮者としても活躍するエッシェンバッハ氏や、アジア人初のショパンコンクールの覇者ダン・タイ・ソン氏なども、自身の楽器コレクションの中で、最も好きな楽器だと教えてくれました。

20世紀初頭のベヒシュタインのピアノは、そもそも残っているだけで貴重です。個人が所有する最も大きな楽器といえるピアノが、両大戦を経て保存されていることは、一つの奇跡です。ただ、そうして奇跡的に残された楽器の中でも、リストアと呼ばれる楽器修復を、正しい形で経た良質なものは、他の楽器と同様、更に少なくなっていく。また、現存する数少ないベヒシュタインのピアノの多くは、コンパクトな自宅用モデルがほとんどです。スタジオフォーレにある状態の良いベヒシュタイン黄金期のモデル C（幅広い表現が可能なサロン用のコンサートピアノ）は、世界的にみても貴重であり、欧州、そして本場ドイツでもなかなか見る事の無い楽器と言えます。

## 歴史的な楽器を維持すること

文化的遺産＝ヒストリカル楽器と言えるこのベヒシュタインは、聴くものにとっては、非常に魅力的ですが、一方で多くの問題を抱えています。第一に、管理の難しさ。楽器は、良い状態を保つ為の温度湿度の管理が欠かせません。気候の変化が激しい日本での大きな楽器の管理は、容易ではありません。そうした徹底した管理のもと、高い専門性と知識を持った楽器工や調律師による定期的なメンテナンスも勿論必要でしょう。この楽器が刻む世紀を超える記憶を、長く正しく残すこと。それは、時を経るに連れ、その困難が増えていくことかもしれません。

存在が貴重で、管理が大変で、奏者にとっても稀にしか触れることができない楽器、となると、一般的なコンサートホールに置かれ、私たちが聴く機会というのは、無きに等しくなります。

スタジオフォーレのベヒシュタインは、2016年にハンブルクにあるスタインウェイの搬送工場ピアノ専用の搬送ボックス（皆様はご覧になったことはありますか？少しでも傾くと大きなアラームがなる仕組み！）に厳重に梱包され、日本へと空輸されてきました。良縁に恵まれ、楽器にとっては理想的なサイズとも言えるスタジオフォーレに嫁入りしたピアノ。歴史ある楽器の価値を真に理解し、たくさんの皆様にその音を聴く機会を作ってくださっている佐藤御夫妻に心から感謝しつつ、、、。

皆様もどうぞ、スタジオフォーレの名器ベヒシュタインをご堪能あれ！